

## 昔の大人は...

取締役副社長

**木野 文海**

Bunkai Kino  
Executive Vice President and Director

四月に入り、真新しい黄色の交通安全帽をかぶりピッカピカのランドセルを背負った子が、上級生に指導されて整列し、手を繋いで登校する姿が見受けられるようになった。

つぶらな瞳、赤い頬をした愛らしいこの子供達は、21世紀を跨ぎながら多感な少年期を過ごすことになるが、私が少年期を過ごした20世紀の前半とは大きく様子が変わっている。

青ッパナを垂らしている子、シモヤケやアカギレのできた子はいない。何故だろう？。

皆、洒落た靴を履き、格好いい自転車を持っていて、どうも男の子より女の子のほうが活発に見える。そして、弱い者を庇ってくれる餓鬼大将が見当たらないが...

私は、戦時中に学童疎開に参加して、毎日ひもじい思いをしたが、胸を張って「日の丸」に向かって「君が代」を歌い、国を愛することを学んだ。

この子供達の父母や学校の先生の多くは、国歌は歌わずに塾通いで育ち、効率性や物欲を追及するのに躍起になっているのであろうから、躰など良い伝統が伝えられていないのではないだろうか。

何が幸せか、どちらが良いかは論議を呼ぶことであるが、「勉強」については現代に、「遊び」に限って考えれば私達の世代に、それぞれ軍配が挙がるのではないだろうかと考える。

この正月、何十年ぶりで凧上げをした。

知人が孫をつれて我が家の近くの公園に来たので一緒に遊んだのである。ゲラー・カイトと呼ぶ西洋凧はよく揚がるが、竹ひごの糸の張り方や尻尾の付け方を工夫して、技を競う楽しみがないのでいささかも足りなかった。

そして、近くで遊んでいる子が持っている竹馬はアルミニウム製だ。節の揃った二本の竹を見付ける喜び、長い竹を持っている自慢はないのだ。

春になれば、下駄の表裏で天気を占い、蕨、ツクシ、



フキノトウなどを採るのを競い、海へ出れば、観光の地引網ではなく、漁師と共に老若男女総出で網を引き、分け前の魚を持ち帰る楽しみを味わったものだ。

夏休み。雨でも、夜でも、いつでも泳げる温水プールも結構だが、水泳はプールで教わるのではなく、自然に接して波のある海や川で覚えた。

将棋、トランプ、積み木落とし麻雀等で家族の団樂が計られた。今ではこれらの遊びは部屋に籠って一人でパソコンで遊ぶものなのだ。井戸汲み、薪割り、庭掃除など子供も家事の一端を担い、家庭が成り立った。

しばしば家庭崩壊が報道されるのも、当然の成り行きと考えている次第である。

秋。パチンコを作るのに丁度良い二股の枝をやっと二つ探して持ち帰り、一つを物干し竿を上げる二股に...と母親に提供してお駄賃を貰った。いつもは水飴を買えないので遠くで見ていた紙芝居を、その日は威張って前で見れたのだ。(テレビでアニメを見る方が素晴らしいのか?)

寒くなった。落ち葉を集め焚き火だ。芋が焼けるのを待っている間の木登りやおしゃべりが楽しく思い出される。

今、少子高齢化、国家財政、エネルギー、環境、食料等々多くの難題を抱えている。

いずれも将来、この可愛い子供達が成人して社会の中心として活躍するとき、苦難することになりそうである。

少子高齢化社会の到来は避けられないが、せめて他の問題については解決の道筋だけでも付けなければならない。

「最近の若い者は...」という言葉は、古来、言い(言われ)続けられているが、それは次の世代を案ずるのか、それとも自慢話なのか?、そのいずれかだと思ふ。

「昔の大人は...」と言われぬよう努力しなければならない。